

頼山陽記念文化賞受賞者一覧

(その1)

回・年度	受賞者	主な受賞理由
第1回 【昭和58年度】	太刀掛重男(72歳) 新制作座	多年にわたり頼山陽の研究と献詠詩の募集、編集に尽力した。 多年にわたり全国各地で「頼山陽」を公演し、演劇を通じて多くの人々に頼山陽についての理解を深めるうえで貢献した。
第2回 【昭和59年度】	村上幸彦(66歳) 中村昭三(45歳)	多年にわたり頼山陽について研究を続けるとともに、広島城の復元などに尽力した。また、多年にわたり県史跡「頼杏坪役宅」の保存・管理及び一般公開に積極的に努めた。
第3回 【昭和60年度】	阪田泰正(72歳)	医師として医療に携わる傍ら、郷土の歴史・文化の研究を続け、地域文化の振興に貢献した。
第4回 【昭和61年度】	北川 勇(76歳) 竹原郷土文化研究会	頼山陽とゆかりの人物について特色ある研究を続けるとともに、読書会の実践と指導に尽力した。また、地域における歴史と文化の継承と創造の活動を推進するとともに、街並み保存に貢献した。
第5回 【昭和62年度】	賀谷倭登(62歳)	多年にわたり頼山陽と地域のかかわりについて研究を続けるとともに、資料の収集、公開・展示や講演活動を通して頼山陽についての啓発活動に尽力した。
第6回 【昭和63年度】	真下三郎(81歳)	広島県文化財保護委員として、民俗芸能の調査研究や保存に努め、地域文化の振興に貢献した。
第7回 【平成元年度】	益田与一(81歳)	頼山陽とその作品についての研究を続けるとともに、その研究をライフワークとし、「芸備歴史散歩」にまとめて刊行した。
第8回 【平成2年度】	財間八郎(91歳)	尾道地方の文化財調査や保護に長年携わり、尾道における頼山陽関係の文献の発券、整理などに貢献した。
第9回 【平成3年度】	菅波 寛	菅茶山とゆかりの人物について研究を続けるとともに、郷土文化の振興に貢献した。
第10回 【平成4年度】	藤村耕一	地域の文化財保護と調査研究に尽力し、郷土文化振興に貢献した。
第11回(平成5年度)～第13回(平成7年度)は、該当なし。		
第14回 【平成8年度】	池田明子(50歳)	頼山陽にかかわる研究や文化活動に尽力し、その研究成果を「頼山陽と平田玉蘊」にまとめて刊行するなど、郷土の文化振興に貢献した。
第15回 【平成9年度】	熊本県苓北町	長年にわたり頼山陽公園、頼山陽詩碑等の建設・建立・整備等を通じて、頼山陽の顕彰と文化継承に尽力した。また、平成7年度から開催する『吟詠「泊 天草洋」全国大会』を通じて、名吟の継承と地域文化の振興を図った。
第16回 【平成10年度】	門 玲子(67歳)	昭和48年から、江戸時代後期の文人江馬細香の研究を継続し、その第一人者としての地位を確保した。また、江馬細香と関わりのあった頼山陽の隠れた側面を、細香の書簡などで紹介した。

(その2)

回・年度	受賞者	主な受賞理由
第17回 【平成11年度】	稲葉長輝(83歳)	昭和44年から月ヶ瀬村内の古文書研究や文化財調査・保存活動に尽力した。この中で、頼山陽と月ヶ瀬村との係わりについて研究を重ね、山陽来村の事跡を解説・紹介した。
第18回 【平成12年度】	頼杏坪先生伝を 読む会	平成8年1月にこの会を結成し、研究の成果として平成11年12月に「頼杏坪と運甕居一備北での足跡一」を出版した。また、平成12年3月には、出版に際して使用した資料の所蔵や、今後頼杏坪や頼山陽に関する資料の収集を図るため、運甕居文庫を創設した。
第19回 【平成13年度】	見延典子(46歳)	頼山陽の母である梅颯が59年間にわたって書き残した「梅颯日記」をはじめ、多くの関係資料を博搜し、その成果として梅颯の評伝を上梓した。また、数々の文筆活動や講演活動を通して郷土の文化の振興に貢献した。
第20回 【平成14年度】	入船裕二(79歳)	「尾道今昔」「玉浦詩話」を上梓するなど、多くの文筆活動を通し、尾道に係わりのある歴史事象や人物、さらには漢詩を紹介し、郷土の歴史の一端に灯りを点じるなど、郷土の文化の振興に貢献した。
第21回(平成15年度)、第22回(平成16年度)は、該当なし。		
第23回 【平成17年度】	江差町の歴史を 紀行し友好を進 める会 (代表 石橋藤雄)	弘化3年(1846)10月、蝦夷地探索の旅に出た頼三樹三郎が、江差雲石楼において、北方探検家松浦武四郎と行った「百印百詩」の偉業を後世に伝えるため、「百印百詩」の顕彰碑を建立した。 併せて『百印百詩を読む』を出版するなど、三樹三郎の業績の顕彰に努めている
第24回(平成18年度)は、該当なし。		
第25回 【平成19年度】	藤高一男(68歳)	「日本外史」の現代語訳に取り組み、平成13年5月、「頼山陽 日本外史を読む I」を刊行した後順次刊行を続け、平成18年2月に最終巻となる「頼山陽 日本外史を読む V」を刊行し、全5巻が完結した。また、「日本外史」の研究者として頼山陽入門講座の講師を務めるなど、地域の文化の向上に貢献した。
第26・27・28回(平成20・21・22年度)は、該当なし。		
第29回 (平成23年度)	古川隆次郎 (69歳)	永年にわたり頼山陽史跡資料館が企画展を開催するにあたり、頼山陽の書をはじめとして、所有する秀逸の作品を幾度となく提供し、来館者に深い感銘を与えるとともに、「頼山陽ネットワーク」を立ち上げ、その代表として全国の40余りの団体を統括し頼山陽の業績を後世に伝える組織を造った。

(その3)

回・年度	受賞者	主な受賞理由
第30回 (平成24年度)	橋本正勝(66歳)	約40年に亘り頼山陽の遺墨や遺品を数多く収集し、美術館や資料館で展示し頼山陽の思想と業績を広く社会に広めた。又頼山陽の思想を長年研究し、各種団体の集まりでたびたび講演をし、頼山陽の精神と業績を九州を中心に広めた。
第31・32回(平成25・26年度)は、該当なし。		
第33回 (平成27年度)	頼和太郎(67歳)	頼和太郎氏は、ご尊父惟勤氏の遺志を引き継ぎ、頼家伝来の「杉ノ木資料」をさらに有効に活用すべく当財団に寄附された。これによって財団の基本資料が飛躍的に充実したのみならず、頼山陽史跡資料館の発展と頼山陽研究等の進展に多大な貢献をした。
第34回 (平成28年度)	齊藤裕志(67歳)	齊藤家は400年前美濃から松前に渡り、江差町年寄を勤める11代齊藤佐治馬が、蝦夷地遊歴中皮膚病にかかった頼三樹三郎を援けて帰京後も長く親交した。 齊藤裕志氏はその縁から「頼三樹三郎研究会」を立ち上げ、頼三樹三郎が江差文人と詩作交遊した「江差八勝碑」建立に尽力し、書軸や書簡の収集 資料の上梓 講演活動などにより、頼三樹三郎の業績を北海道中心に広めることに貢献された。